

東京麻布教育研究所永島隆孝嗣先生国頭村学校訪問記録 (国頭村教職員研修会)

平成28年5月16～18日の4日間、国頭村教育委員会主催の学びの共同体スーパーバイザー招聘の授業研究会が国頭村の4つの学校で行われた。村教育委員会が毎年恒例となつてこの時期に協同学習の研究者を招聘し、村内のすべての先生方に協同学習や「学びの共同体」の理念における学校経営や授業経営の研究機会の提供である。

国頭村教育長園原寛先生は、4月の教職員辞令交付式のあいさつにおいて「村内すべての児童・生徒の学びの保障」をお願いします。と述べられた。言葉だけでなく、しっかりと先生方の学びの機会も提供されている。国頭村教育委員会の計らいに感謝の一言である。

文科省は2014年11月20日、26文科初第852号(諮問)において、アクティブラーニングとして主体的・協働的に学び、「何を教えるか」という知識の質や量の改善から「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視する「学び合い」を提案している。

園原教育長は、これまでの一斉授業からの脱却、授業経営の理念や方法論のシフトを図り、一人残らずすべての子ども達が、「学校が楽しい」、「学校では何とかなる」、「学校では大丈夫」、「学校には友達がいるから」、「分からないから学校へ行く」、「難しいから友達と一緒にやる」等の声(仲間との協働を支える)が聞こえる学校像を期待している。子どもの声と真摯に向き合う「教師たちによる子どもたちのための学校づくり」に、村すべての教師たちの授業経営のベクトルを育てたいという教育長の『夢と希望』に敬服する。



辺土名小学校授業研究会



奥間小学校3年理科



国頭中学校3年数学



佐手小学校5年国語

4日間で、村内4つの学校で様々な形式で授業研究会が行われ、村内に在任するすべての先生方が一人の講師から助言や個人的なアドバイスをいただき、日常の授業経営の不安や疑念を共有した。

5月16日(月) 国頭村立辺土名小学校

5校時 焦点授業

5年理科

授業提案者：T・N先生 単元：植物の発芽の条件

「植物の種子が発芽する条件を調べるために、下の図のようなそうちをつくりました。まず、試験管にマメと水を入れ、そこに水に浸るようには胚乳を入れた。その上にもう一つマメをのせます。そこから少し上にさらに胚乳を入れた。その上にまた一つマメをおきました。同じそうちを4つ作り、それぞれの条件でマメが発芽するかどうかを観察しました。これについて、あとの各問に答えなさい。

温度 25℃ 25℃ 5℃ 5℃
明るさ 明るい 暗い 明るい 暗い

(1) いっぱんに、種子が発芽するのに必要な条件と、必要でない条件について、下の文中の ① ～ ④ にあてはまる条件を入れなさい。ただし、答えは後のア～エの組み合わせの中から一つ選び、記号で答えなさい。

「発芽には、① と ② と ③ とが必要であるが、④ は必要でない。」

	ア	イ	ウ	エ
①	光	空気	水分	温度
②	温度	光	空気	水分
③	水分	温度	光	空気
④	空気	水分	温度	光

授業は実にシンプルにデザインされた。最初の共有問題が左のプリント。授業者は前時までの振り返りを簡単に口頭で行い、すぐに問題を手渡した。数分の言葉でのやりとりが、この問題を解くための足場づくりになったか?どうかである。

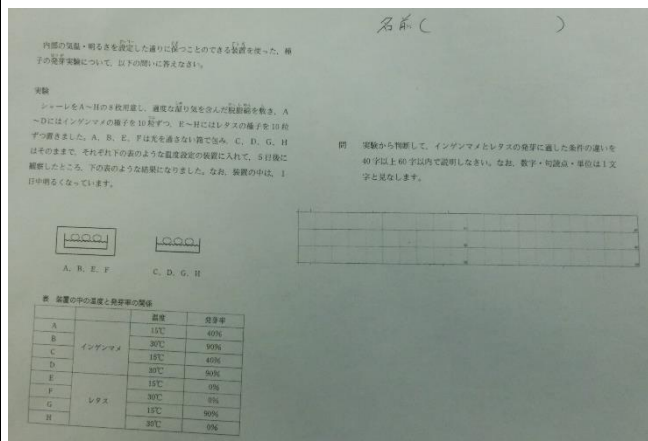
写真①、しばらく一人で問題に向き合っていたが、やがて「分からない」が交流し始める。授業者は「困り感を持った子」を表情やしぐさからみとり、仲間につないだり、子ども達が躓いている「分からない」を整理してあげるケアを心がけて全体を観察する。ここで永島先生が指摘された「みとり」が肝心となってくる。



写真①



写真②



左の問題がジャンプ問題

☆ 『緻密に考えて大胆に出題する』

本時の難しさは「データの読み取り」と題意にそった解答の説明がテーマとなる。写真下の女の子、訊けば聞くほど、書けば書くほど脳に汗をかいている状況である。難しいからつながりが生まれる。



前の教卓でプリントを確認する（できた子ども達に〇つけ）。



前の子どもとプリントしか見れない

- ▲ ケアが見落とされる。
- ▲ 持ってきた者だけが恩恵を得る
- ▲ できた子どもが優先される。
- ▲ 無意味な待つ時間ができる。



〔 ケアする 〕

自分一人ではできない、友だちに訊くこともできない、周りの友達に関わってくれない、

今は先生が関わってあげることが、この子の安心になる。「依存すること」を教え「仲間につなげること」ことが教師の役割となる。



【 研究協議会 】



国頭村独自の授業研究スタイルがある。今回が初めての先生方には少し違和感のある研究協議会かもしれない。授業者の「授業説明」の後、観察者（事前に観察グループを教師に割り当てる）がグループでの学びの質や躓き、仲間関係などを報告してもらいながら観察者自身の日常授業からの不安や疑念を皆に向けて提供する。一人の教師の質疑は基本的にスーパーバイザーが回答するのではなく、参加者みんなで考えるのが基本である。研究協議会は形式的な形ではなく、あくまで教師たちの「分らなさ」や「困り感」を互いに訊き合い、支え合いながら、その経験値をあげ、各々の授業の質を高め、それが「子ども達の学びの保障」につながる事が目的とされる。つまり研究協議会の中での話に終わり、教室の授業に変化（改革）が起こらなければ何の意味もなさない。

《永島先生より》

☆「わからないこと」、「困っていること」でしか、できる子とできない子は、つながらぬ。（わかっていることではつながらぬ）

☆「考える」とは・・・ながら考える

ききながら…読みながら…実験しながら…動きながら⇒考える

☆授業から学ぶこと

主役は誰か…縦・横それぞれのつながり…すべての子へのこだわり

☆「おかげさま」の関係を築く場としての授業（関係づくり）

☆「あずける」・「まつ」・「みとる」みんなで実践

T・N先生、焦点授業の提案ありがとうございました。いよいよ先生も「学び合う」授業3年目に入りました。3年目の先生として後輩や新任赴任の先生方の支援よろしくお願いします。『新人は勝手に育たないチームで育てる。』わたしの方も少しシビアに語らせてもらいます。（このシートから学んでほしいことを願って）

右の写真、子ども達がジャンプ課題に取り組んでいて授業者は教卓を間に「ただ待っている」状況だと思います。この時「先生の脳裏には何が浮かんでいたのか」もう一度思い出してください。①ケアの要する子はいなかったか。②個々の能力への対応について思案していたか。③最初の共有課題は、ジャンプ課題解決のための足場づくりになっていたか。④全体での共有の時間があった方がよかったのではないか。日々の授業でもう一度見つめてみてください。

《教頭通信より》。自分の授業において、学級の子どもの「学び」はどうだったのか、きびしいけれど日々の実践を問うていくことが私たち教師の最も大切な仕事であることは間違いありません。…教頭としてこのような学びのできる学校に赴任できたことを素直にうれしく感じます。辺土名小学校の先生方といっしょに『すべての子どもたちの学びを保障する』取り組みに、じっくりと向き合っていきたいと思います。

「あわてるな、ゆっくりであるほど、改革は本物になる」。ヘマしてもいい、それを授業に引きずるな。肝心なことは、教師が「あきらめてはいけない」ということだけです。・・・素敵な教頭先生です。



5月17日(火) 国頭村立国頭中学校

[1 年家庭科] : 栄養のバランスを考えた弁当メニューを考えよう。

今年4月、初めて教壇に立ち生徒たちと向かい合う授業者である。どれほどの緊張と不安があったことか、前日まで同僚と夜まで残って授業デザインや教材研究をやっていたという。ありがたい、実に感謝の念に尽きる謙虚な授業者である。改めて確認しておきたい国頭村が目指す教師は「できる生徒」「できる教師」ではなく、「向かう生徒」「一人残らずに・・・「学び合い」にこだわり、前に進む教師」である。

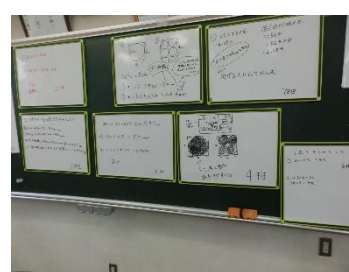
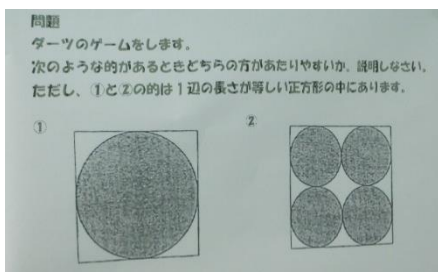


上の写真、緊張しながらも「生徒の学びを・・・考える授業者と、与えられたテキストで協同して取り組む1年生たちである。どの写真を見ても実に関係がいいことがうかがえる。単に本時の授業だけでなく、学級担任の日常の学級経営が生徒の横のつながりをつくってあげている。

▲男女間の発言の差が明確にある⇒指名してでも女子に多く語らせるようにする。

▲明らかに個別の支援を要する子もいる⇒ぜひ国頭中すべての先生のかかわり方を共通実践してほしい。

[3 年数学] 体積の比を求める

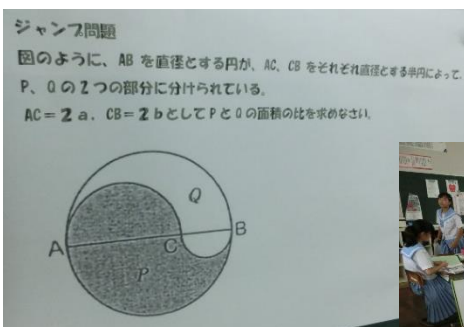


《共有問題》 面白い問題であるが、指導内容や本時のねらいに則した問題になっていて、生徒が題意を踏まえた解答と説明ができるかが問われる。写真中央、違和感なくきき合うグループである。写真右、グループの解答がホワイトボードで提示された。ボードの活用は常々言っているが気をつかいたい、賢い個人に支配されていないか？弱い者に押し付けられていないか？グループのまとめではなくグループで学んだことをもとに個の考え方や解答が記されているか？共有は、様々な違う考え方を優先して価値ある共有にしているか。

《ジャンプ問題》「緻密に考えて大胆に出題」

指導内容やねらいに則し、簡単でなく、仲間と協力して解答することにふさわしい問題となっているか？

面積の求め方だけにとどまっていないか？



右の写真の二人の女の子
授業終了後も「訊き合っている」
難しいからやりががあり、「わかったかった」のでしょう。



《ケアする》

ケアの目的や意義をしっかりと理解した上で、さらにケアや「仲間につなぐ」タイミングについて先生方で授業や生徒を観察してほしい。



[研究協議] 永島先生より

☆音読に目的を持たせる。音読で学びをリセットさせる。テキストとつなぐ。

音読の目的・・・個人を物語に埋没させる。物語について自分のイメージを描かせる。

音読の目的が形式化し、そもそもの読む目的が理解されていない。音読は誰のためにやっているのか。

☆ホワイトボードの活用⇒個が学ぶためにボードの活用の仕方⇒シンキングボードとして

▲ 発表のツールとしての活用に傾斜している⇒使えばいいで終わってしまう。

☆トリアーズ (治療の順序) 必要な支援の選択・支援の優先順序を決める。

☆グルー学習の切り上げ(学びのリセット)⇒ いっただん授業の進行を中断して全体に戻す。教師の見取り。



5月18日（水） 国頭村立奥間小学校

《校内研テーマ》

共に学び合い 確かな学力を身につけていく 児童の育成
～ 国語科における言語活動の充実を通して ～

〔全教室公開〕 奥間小学校の研究会は全教室、全職員が授業を公開した。



写真①

私の時間の都合で、2校時に設定された1, 2年生の授業写真は残念ながらありません。写真①、S先生保健体育（4年生）写真②N先生国語。写真③N先生5年社会科。写真④M先生5年算数。すべての教師が教室を開いた。学校づくり、授業づくりの一つの壁がクリアされた。



写真②



写真③

次へ、上に示された校内研修のテーマがある。校内研修は法的に示された教師の義務である（研究と修養の義務）。さて授業者達は、前任校や研究会等を通してそれぞれの理念や理論を持ち備えているものであるが、学校においては、校内研修の責任者は校長である。教育長の言葉がある「みなさん、いろんな授業理論をお持ちのことと存じますが、ここ、国頭に在任する間だけでも、学びの理論「協同学習」でお願いします。」・・・校長は教育長の命を受ける。職員は校長の理念とビジョンの達成に向けて



写真④

動かなければならない。なぜなら、職員の職務の管理と子ども達の学習権の最終責任者は校長だからである。

奥間小学校のそれぞれの教室で学んだ子ども達は、どの教師が担任になっても、同じ理念の中で育てられることになる。これが校内研修で統一したテーマを持つことの最大の意義である。国頭村は中学校が一つに集約されます。すべての小学校が頑張っています。奥間小出身の子ども達が中学校に入った時に授業で躓かないためにも、全職員で向かうことが大切になってくるのです。「点数は気にするな。」これも教育長発言。

「ヘマしてもかまわへん！明日の仕事にひきするな。『初め』は誰にでもある。あきらめたらあかん。」

昨日のNHKプロフェッショナルの番組で、上司から新人職員に向けられた言葉である。

《共通実践》



左の掲示物、校内研で確認されていることと思います。ぜひ全職員で教室で具現化してください。右写真、左の掲示物が形となった教室です。

この掲示は村内のすべての学校が共有しているアイテムです。ただの飾り物にせず、言葉が形になって子ども達に安心してきき合える教室を提供してください。



〔5校時焦点授業〕 3年 国語 授業者 I先生 「わすれられい おくりもの」（物語）



ねらい：中心人物の心の動きをもとに、読み深めよう。

個人テーマ：他教科と関連を意識した言語活動の工夫

焦点授業の提供は大切である。すべての職員が、1つの授業の事実を観察し、参観者それぞれの感性や視点を学ぶことになる。授業提供者は、常に敬意を表し感謝の念を送りたい。

〔研究協議会〕 永島先生より

☆ 研究協議会の意義

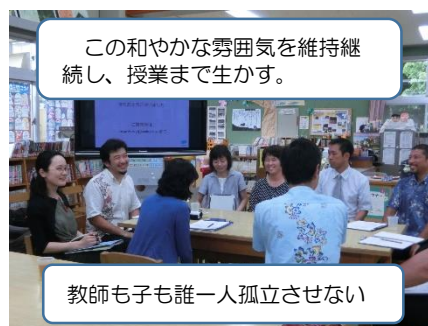
自分の授業では授業者自身が自分をあまり見つめられない。

参観者（他者の）の「みとり」から学ぶ

「みとり」は焦点授業を中心に共同で行い、次回への工夫は個の教師で行う。・・・「みとり、見取り、診とり」どっち？

▲ 国頭村のすべての先生方共通の課題（テーマ）として

- ・子どもの表情や仕草をもっと見る⇒アプローチを感じ取る。
- ・子どもの感じ方や表情から授業をデザインしていく。
- ・「きく・つなぐ」その前に ⇒ 『あずける・まつ・みとる』



この和やかな雰囲気を持続し、授業まで生かす。

教師も子どもも誰一人孤立させない

5月19日(木) 午前 国頭村立安波小学校

《校内研テーマ》

一人ひとりの学びを保障し 学びの質を高める授業
～ 少人数・複式学級における学び合いの工夫を通して ～

[1・3年複式] 授業者：I先生 国語 「気持ちを伝える話し方・聞き方」 (3年教材)

個人テーマ：異学年の児童をつなぐ教材の工夫

今年度4月、他地区の大規模校からの赴任である。安波小に赴任を聞かされた時どんな思いでいただろう。限界過疎地域である、山村交流事業の2世帯の家族が今日までを維持していると言っても過言ではない。子ども達は地域の宝ものように大切にされ、純粋無垢に各々がほんとに豊かにたくましく日常を楽しんでいる。学校が完全に地域のコミュニティーとしての役割を担っている。

「地域の特性や実態に応じた学校創り」とはよく聞く言葉であるが、今、実際に私の目の前にある現実がそうなんだと受け入れて考えていくしかない。これまでの私の学校の概念や授業理論を完全にシフトしなければ・・・I先生の挑戦の始まりです。



I先生、何も焦る必要はありません。困った時には常に職員室の同僚と一緒に考えてあげますよ。なによりも先生のクラスの子どもたちが、「先生が困ったときには私たちが助けてあげる。」そんな顔してますよ。先生も安心して、不安があるときは子ども達や

同僚に依存してください。それこそがみんなで育ち合い・支え合う学びの学校です。わたし達は育てる者だけでなく、私たちも育つことが大切なのです。子どもから学ぶこと、教えられることに謙虚で素直になりましょう。分からない事はきいてみましょう。思ったことは言ってみましょう。いろんなことに挑戦していきましょう。まだまだ始まったばかりです。ゆっくり共に進んでいきましょう。



[4年単式学級 女2名] 授業者：R先生 道徳 「お母さんの請求書」

個人テーマ：学力差異を考慮する学び合う授業のデザインと教材の開発

本校赴任2年目の授業者、今年は他の2名の先生が新任なので、ほとんど校務分掌を引き受けなければならない。今年度は特に研究主任という職責が任せられた。前年までの研究の蓄積を絶やすわけにはいかない。なによりも、教師が変わるたびに授業のシステムが変わってしまったら一番困るのは子ども達である。

教室には、さまざまな個性を持った子どもが共存する。たった2名だが、2名ゆえにがまたある。授業者のシレンマの克服が2人の子どもの学びと育ちを保障する。教師たちの目の前の状況は毎年確実に変わる、その環境と状況の変化の中で授業者の試行錯誤が研究なのである。例えば写真右下、教師が一人の子を相手にしたとき、もう一人はお客さんになってしまいます。これでよかったのかどうかは授業者でしか判断できない。～「研究は日常でやる、日常をやる。」・「研究もみんながやる、みんなでやる。」「子どもと一緒にやる」～



[5・6年複式] 授業者：M先生 国語 「漢文に親しむ」

この教室で「学び合う授業」がわかっていないのは授業者だけである。不思議なことにそれでも授業はしっかり学び合いの授業になっていくのです。…なぜ?…それは、授業者が謙虚に子ども達の言い分を聴いて授業を進めているからです。つまり、授業者の「先生もわからないから教えてね。」という謙虚な姿勢に子ども達が素直に答えているからなんです。この学級が始まってまだ1ヵ月、教師を支えようとする子ども達と先生との関係が築かれつつあります。M先生、楽しみながら育っていきましょう。子ども達と共に。



国頭村には5つの小学校のへき地校がある。村教育委員会は、過疎化の中の特殊事情の学校に赴任する先生方に向けて年度当初に研修会の機会を設けている。例年はへき地校3年目の先生に依頼しているところだが、本日の佐手小学校のY先生は前年度に続き2回目の提案授業を引き受けてくれた。感謝の一言に尽きる。

どんなへき地であっても、憲法で示された「学習権の保障」は、すべての子ども達とその恩恵を保障されなければならない。文科省は2014年から「アクティブラーニング」への転換を図ると明言された。わたし達へき地の学校でも主体的・協働的で探究型の授業づくりに挑戦しなければいけないことが義務となったのである。



【学級づくりと教材研究】 教師に入っすぐに感じることは、「この教室に通う子ども達は幸せだな〜。」様々な特殊事情を抱えて形成されている学級である。学級員4名のうち3名が3年時の転入生である。語れない困難を担任はすべて受け入れて「学びの保障を目指して」日々教材研究を重ね、子ども達の笑顔



を絶やさないように向き合っている。左写真、見事な学級掲示物、「仲間」と題された写真誰が教師かわかりますか？

右写真、本時の授業まで使われてきた教材・教具の数々、授業終了後にも奥間小の校長先生と資料の検証を語っていた。

この子達にとって今日の授業がどうだったかが問われる。



【きき合い・支え合い】 写真①、思考を助ける（考えを深めるための材料）、登場人物の関係図である。



写真①

主人公の人柄や、他者との関係から僕なりのイメージを描く材料となる。写真②、実に和やかに本音で言葉が交わされる、たどたどし言葉、もどかしい仕草等様々である、しかし教師も仲間も皆がそれぞれ個性を受け入れて聴き合っている。この子達の「もどかしさ」を否定してしまうと彼らは「沈黙する」という最後の武器をかざす。授業者の受け入れに安心して自分を語れる空気こそ私たちの目指す支持的風土である。写真③、子ども達の声を丁寧にきいてくれる自分の言葉が記されるたびにうれしいのではないだろうか。大型教科書の活用の意義を十分果たしてくれている。写真④、自分の言葉をうまくまとめきれない男の子、パニック寸前である。書くことが苦手な子、どこにでも居ます、ゆっくり育てましょう。



写真②



写真③



写真④

【研究協議会】 へき地5校の全職員が今日の授業を中心に、日常の授業の不安や授業アイデア等の情報を共有する。今回の永島先生の訪問で一番人数が多く協議会も盛り上がってくれた。やはり他校の先生方との情報の共有は大切である。真ん中の写真は、へき地校の管理職のみなさんです様々な学校状況を他者にきいてもらえるだけでも何故か少し気持ちが休まるものです。機会提供の授業者へ感謝しましょう。

